

数学五輪世界1位 松本深志高3年・狩野さん語る

満点で金メダル「努力報われた」

オーストラリアで7月に開かれた高校生以下の「国際数学オリンピック(IMO)」に出場して満点で世界1位となり、2年連続の金メダルを獲得した松本深志高校3年の狩野慧志さん(17)。「松本市」が信濃毎日新聞のインタビュに応じた。憧れの数学者、テレンス・タオさん(カリフォルニア大ロサンゼルス校教授)から金メダルを授与され「努力が報われた」などと述べた。

■満点 達成感と安心感

「目標とした満点を取る自信はあったか。」

「自信はあったけれど(結果は)出題内容による。『運ゲー』の要素があり、どうなるかと思っていた。運が良かった。満点を取れたことはうれしい」

― 勝因は。

「1日目を終えた夜に日本代表の6人でそろって(自分の不得意分野の)幾何の問題を解いた。みんなその問題が解けたから、かなり気が

楽になった」

「ずっと同じ問題を考えているとアイデアが浮かばないことがある。第5問と最も難しい第6問を代わり

代わりに考え、第6問のアイデアを得られた。解答の記述が長くなり、まあまあ焦ったけれど、100%集中できた。残り時間は10分だった」

― 満点が分かった時はどのような感じだったのか。

「(宿泊先の)ホテルのロビーに日本人スタッフが知らせにきた。その時の気持ちは達成感と安心感がミ

ックスされた感じ。日本代表のみならず『おめでとう』と言われた。うれしかった」

■憧れの人から表彰

― コンテスト以外の他国選手との交流は。

「スポーツをしたり、ゲームをしたりして楽しんだ。アメリカの選手と(数値を求める)『早解き対決』をして負けた。(コミュニケーションアプリの)『ディスコード』で知り合った人たちと写真を撮った」

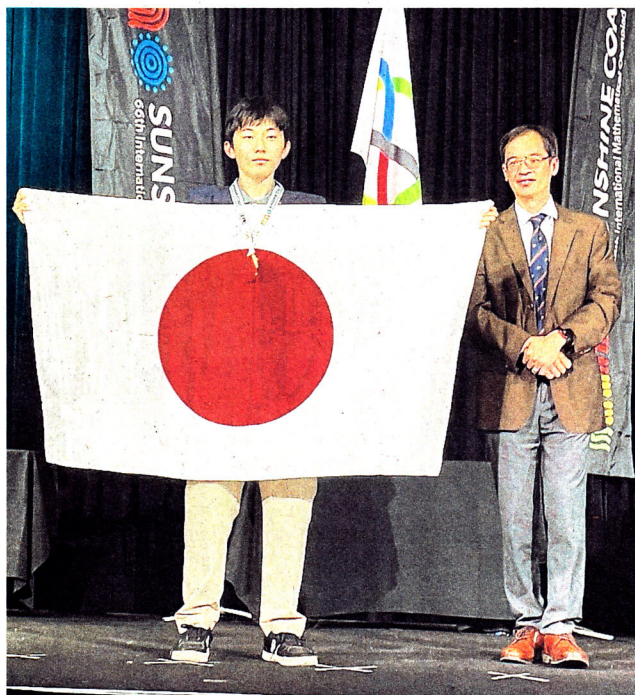
― 「数学の問題を紹介し合うこともあった。数学という趣味を共有しているから、交流は楽しかった」

― 満点を獲得した選手は、数学者のテレンス・タオさんから金メダルを授与された。

「授与される時『ウエルダン(よくできた)』と言われた。努力が報われた。昨年は満点に届かず(テレンス・タオさんから)表彰される満点の選手を遠くから見ていた。今年はメダルを掛けられる側に行けた」

― IMOに挑んだ3年間で振り返るとどうか。

「点数は1年目が31点(銀メダル)、2年目が37点(金メダル)、3年目が満点の42点(同)。1年目から2



数学者のテレンス・タオさん(右)から金メダルを掛けられ、国旗を示す狩野さん(数学オリンピック財団提供)

最難問は「100%集中できた」 他国選手と交流も

識を身に付けることができた。2年目から3年目にかけては安定した。簡単な問題でつまずくことがなくなった」

「苦手だった幾何の分野も苦手と言わずに済むくらいには成長できた」

■将来の夢は数学者

― IMOを終えて考えていることは。

「満点でIMOを終えることができて良かった。もう出場することはないと思うと寂しさもある」

「次の世代の育成に関わりたいう気持ちはあるけれど、どうしたらいいかわからない。数学一点張りだと、IMOが終わってアイデンティティがなくなる。他の趣味もつくりたい」

― IMOの次は大学受験が控えている。

「東京大を目指している。IMOでは各国の代表選手と大学進学について話すこともあった。マサチューセッツ工科大(MIT)を目指す人が多いと感じた。MITは大学院に進学する際の選択肢に入っている」

― 将来のビジョンは。

「数学者になりたい。研究してみたいのは組み合わせの分野」

― インターネット上ではIMO出場を目指した主人公が奮闘する、長野県が舞台の映画「サマーウォーズ」に狩野さんをなぞらえて称賛する声がある。

「映画を見たことがあったので、言われてみれば確かに(共通点はあ)る」と思った」